プロローグ

「COVID-19が語りかけるもの」

文章：趙晟桓
日本語訳：崔多蔚

本書『我々はどこへ向かうべきか—コロナ時代を生き抜く地球市民こころ白書—』は4月に刊行された『世界はなぜ韓国に注目するのか—韓国社会COVID-19市民白書—』の続編である。前回と同様に「市民白書」という形で20代から60代に至る幅広い世代と多様な層が参加した。筆陣は主に円光大4名東北大4名、そして 西江大4名の学生と教授で構成されており、その他にも外国人が4名含まれている。

コロナ時代を迎えコロナ19に関する本が溢れかえっている。その多くの書籍のなかで本書が持つ特徴を一つ挙げると「省察」であると言えよう。コロナ19が我々に語らんとしているのは何か、そして我々はこの先どうすべきなのかについて考える時間を設けたかった。特に第5部では「青年の声」を込め、未来世代の考えと悩みを傾聴する場をつくった。彼等こそこの先人類と地球の未来を担っていく「地球世代」だからである。

読者の便宜のために各原稿の要旨を簡略にまとめてみた。お忙しいなか時間を割いて原稿を書いてくださった円光大学の朴孟洙（パク・メンス）総長、遠く日本から原稿を送ってくださった片岡龍先生、佐々木隼相先生、楊世帆先生、そしてインド人であるにもかかわらず完璧なハングルで素敵な原稿を送ってくださったパドマ・ナムゲル・アジタ教務には特に感謝申し上げたい。

第1部は韓国をはじめ、インド、日本、中国においてCOIVD-19を巡って発生した状況を包括的ないし詳細に紹介した。

著名な東学研究者であり円光大学の総長であるパク・メンス教授の「開闢大学はCOIVD-19にどのように対応したか」という全羅北道地域の最初の感染確定者を円光大学病院で治療できた経緯を紹介している。その過程で著者は我々の忘れられた「共同体精神」が蘇っていることを実感したと振り返り、1894年の東学農民革命が見せてくれた「共和と平和と平等」思想こそコロナ時代に求められる精神であると強調した。

インド人で韓国人女性と結婚し円仏教聖職者となったパドマ・ナムゲル・アジタ（韓国名はウォン・ヒョンジャン）教務の「COVID-19はインドに何を語ってくれたのか」ではインドでCOVID-19が発生した瞬間から対応過程までを詳細に紹介している。我々にとってまだ馴染みの少ないインドに対する全般的な紹介とともに、COVID-19対応の過程で浮き彫りになった宗教間の葛藤問題も扱っているので、韓国の読者にも有益な内容だと思われる。

日本東アジア実学研究会会長で知韓派学者である片岡龍教授の「どんな大学がニューノーマルを先導するのか」では、著者が身を置いている東北大学の総長から送られてきた「メッセージ」を分析の対象とし、「新たな日常」は上層部リーダーによるトップダウン式ではなく、地球村の一人一人が各々の生活現場で「共に」問い「共に」表現していくなかで「夢」のように具現化されてるものだというメッセージを残した。

日本思想研究者である佐々木隼相氏の「科学者は何を伝えているのか」では、コロナ19に対応する過程において、科学者の価値判断が必然的に介入するが、この問題を政府に任せっきりにするのではなく、科学と社会の円滑な疎通のなかで解決して行かなければならないと説いた。

中国人で日本留学中の東北大学の楊世帆氏の書いた「人々はなぜ憎しみ合うか」はコロナ19勃発直後、中国内外で発生した嫌悪と差別の問題を扱いながら、儒学でいう「惻隠之心」、他人に対する同情心がコロナ19事態で発揮されない原因を現代社会の「生命疎外」に求めた。

第2部は経営と市場の変化、そして労働の問題を扱った。
弘益大学経営学科のユ・ゴンジェ教授の「ベンチマーキングの時代は終わった」では、COVID-19が韓国企業に投げかけるメッセージは「これ以上西欧モデルを模倣するのを辞め、"自生的なモデル"を創造せよ」ということにあり、そのためには構成員を信頼する柔軟な勤務環境への転換が必要だと力説した。
梨花女子大学経営学科のユン・ジョング教授の「戦略経営から目的経営へ」では、コロナ時代に企業が生き残るためには経営理念を時代に合わせて転換しなければならないと助言している。新自由主義時代には企業が自らの競争力を証明するため短期間の成果算出に集中する「戦略経営」が選ばれて来たが、相互交流と繋がりが要求される非対面時代において、ペプシコーラのように他社との差別性を強調しつつ自社の存在理由をアピールできる「目的経営」こそ望ましいという。
協同組合「サリム（살림）」のイ・ムヨル理事長は「社会的経済とニューノーマル市場」でポストコロナ時代の新たな社会的経済を提案している。COVID-19は我々に、今まで市場を主導してきた従来の全ての経験とは異なる新たな想像と実験を要求しているが、社会的経済の場合、「価値」と「イノベーション」が交差する「メタモデリング」的発明が必要だという。
「世界は変わり得るのか」は自動車工場労働者のシン・テソプ氏の文章である。人類の矛盾が凝縮されたCOVID-19の警告にもかかわらず、人類は便利な生活を捨てることができないという悲観論とともに、それにもかかわらず全てのことは人にかかっているという希望を語る。

第3部ではCOVID-19によって浮き彫りになった嫌悪と生態の問題を取り上げた。
「再開闢（다시개벽）」編集委員で哲学徒のソン・ミンギョ氏は嫌悪は他者に対する消化不良から生じる感情で、哲学的には衛生と道徳の出会いによって発生すると指摘し、「嫌悪の衛生」から「生態的衛生」への転換を提案した。
「再開闢」の編集長であり国文学者のホン・スンジン氏は「アガンベンはなぜ生命を見誤ったのか」において、「COVID-19は一般のインフルエンザと大して変わらない」という現代哲学者のアガンベンの発言は非人間を排除する西欧的「生命」概念を反映していると悲観し、人間と非人間を包括する生命概念を東学に求めた。
農夫であり生態活動家のジョン・フェシク氏は「社会的距離を置くことと生態的距離を取り戻すこと」で、自立経済と共有生活への転換を通じて生態系の回復力を取り戻すべきだと主張した。
図書出版モシヌンサラムドゥル（모시는사람들）パク・キルス代表の「‘ホモマスクス’ 時代を生きる知恵」では、マスクが日常化する過程で皆がつながっているという自他不二の世界観、市民の自発的な参加と分かち合いの意識、マスク普及制や災害支援金のような反資本主義的要素が発揮され、それによって人々の間で信頼が築かれていったと分析した。
モシムとサリム研究所のジュ・ヨソプ研究委員による「共に創る新しい物語」では、ポストコロナ時代には従来のような少数知識人の「宣言」形式ではなく、新しい物語と形式を「共に」作っていく「共同作業」が重要であると強調した。

第4部ではキリスト教をはじめ儒教、円仏教、天道教の立場から見たコロナ時代の宗教の役割について論じた。
ソウル基督教大学のソン・ウォンヨン教授は「韓国基督教のための神学的ワクチンとは？」において、パンデミック状況に求められる神学的ワクチンを3つ提案している。 一つ目は時代の苦痛と共感し連帯する「プラクシス神学」であり、二つ目は東アジア宗教の伝統と調和する「融合の神学」、三つ目は信仰と修行を兼ね備えた「修行神学」である。
独立研究者のファン・サンヒ氏の「感情の真の理解のための古き未来の知恵」では、朝鮮時代以来道徳感情を重んじて来た韓国の思想伝統が今回のCOVID-19対応において上手く発

揮され、このような韓国の感情論がニューノーマル時代に「古き未来」に成り得ると見渡した。
　円仏教の教務であるイ・ジュヨン博士の「地球的連帯のための交わり」では、映画『シェイプ・オブ・ウォーター』に登場するマイノリティに対する嫌悪と偏見に対抗するためには、情緒的結束を通じた地球的連帯が必要だが、円仏教ではこの問題を融合と混種、そして恩恵の強調を通じての解決を試みていると紹介している。
　天道教ハヌル（한울）連帯のイム・ウナム共同代表は「天地父母を敬う暮らしで」で、今日のパンデミックと気候危機は人間が地球システムを破壊した結果だと指摘し、東学で提唱した「地球を敬う暮らし」を取り戻そうと提案した。
　東北大学日本思想史研究室に留学中のチェ・ダウル氏は「心の霊性に関する3つの仮説」で、心に対する分析と省察が盲目的な「思い込み」を相対化できる「免疫力」を身につけるとし、繋がり・合一・区分の3次元に分けて「心の霊性」を分析した。

　第5部は若者たちの声を汲み込んだ青年広場である。
アート&テクノロジーを学んでいるキム・ユリ氏は「どんな人生を描くのか」で、自分を機械化することではじめて正常性（≒頂上性、정상성）を獲得することのできた従来の諸慣習がCOVID-19によって少しずつ崩壊していると診断し、正常性（頂上性）という型を破り、自分の姿で立場を固める青年になることを提案した。
　天道教青年会運営委員のソ・マンウォン氏の「再び青年になる世代」では、期待より不安で一杯な青年たちの世界をCOVID-19によって人類全体が経験中であると分析し、青年たちが次の世代のために新たな関係と体系を作ることを提案した。
　女性学を研究するイム・ソダン氏の「どう生き残るか」では、COVID-19とデジタル時代の若者たちに求められる能力と、若者たちが担うべき時代の課題、そして若者たちに求められる徳目を提示した。
　哲学を学ぶパク・ジウン氏が書いた「現実との対面がもたらす想像力」は、数カ月前に発生した「コールセンター集団感染」事件で明らかになった非正規職の女性労働者の不安と不平等問題を紹介しながら、非対面時代に疎かになりがちな現実との「対面」がいかに重要であるかを強調した。
　コミュニケーション学をミン・ジオ氏の「『包括的言語』は必要か」では、セクシャルマイノリティ問題を通して包括的な中立語の使用と社会的弱者のための代案言語の使用を提案した。
　最後に「人間世から地球世へ」では、私の所属している研究所で今年から進めている新たな研究を紹介した。 今日、西洋で活発に研究されている「地球学」の研究成果に刺激され、従来の人間中心とヨーロッパ中心の人文学から地球中心と生命中心の人文学への転換を図ろうとする地球人文学である。このような地球的次元の認識論的転換こそ、旧韓末の開闢派が唱えた「再開闢（다시개벽）」であり「精神開闢」ではないかと思う。
　8月中旬を起点にCOVID-19が再び広まりつつある。泣き面に蜂で、異常気象まで加わっている。誰彼無しに皆難しい時代だ。こういう時こそ儒学でいう「日常性」を守ることが重要だと思う。韓国市民たちの徳性が再び発揮されることを期待する。

2020年9月30日